
父と娘と女

雨虹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

父と娘と女

【Nコード】

N7231X

【作者名】

雨虹

【あらすじ】

誰が主人公か、自分で決めていいです。

菜穂「お父さん！あたし大きくなったらパパのお嫁さんになる！」

父「ハハハ、そうか！わかった、約束だぞ！」

二人「指切りげんまん、嘘ついたら針千本のーます！指切った！」

そして12年後…

父「菜穂のやつ、一体どこほつつき歩いてんだ…連絡もしないで…」

菜穂が家に帰ってくる。

父「おい、菜穂！今まで何処に行ってたんだ！心配したんだぞ！」

菜穂「…」

父「おい、菜穂！聞いているのか？」

菜穂「何？」

父「何じゃない！質問に答えなさい。」

菜穂「別に何処を歩こうが私の勝手でしょ？」

大体私今年で17歳なの、子供みたいな扱いしないでくれる？」

父「17なんてまだまだまだ子供の歳だろ！」

菜穂「うっせーな、クズ。」

父「お前：親に向かつて…」

話しの途中で二階の自分の部屋へ行ってしまう菜穂。居間で父はため息をこぼし、2年前に亡くなった奥さんの写真を見つめた。

父「なあ菜津子、菜穂は変わってしまったよ…。お前が生きてたら、菜穂も変わらずに済んだのかな？」

一方その頃菜穂も2年前に亡くなった母の写真をベッドで眺めていた。

菜穂「お母さん…お父さんは変わっちゃったよ…。お母さんが生きてたら、お父さんも変わらずに済んだのかな？」

夜もふけた頃、父は静かに家を出て、何処かへ行ってしまった。

菜穂「お父さんまた出かけたな…またあの女の所かな。」

父は二ヶ月前から、夜遅くに静かに家を出る事が多くなった。しかも、決まって菜穂が風呂を済ましてしばらくしてからだ。

美紀「おじさんって本当にクズだね。娘さんに隠れて私に会うなんて。」

父「言えるわけないでしょうが、娘とたいして歳が変わらない美紀ちゃんと夜に会ってるなんて…」

美紀「で？今日も前金になるけど？」

父「いや、今日はそういうんじゃないんだ。ちょっと話があった…」

美紀「何？」

父は少しため息をつく、美紀の目を見つめた。

父「もう、こんな関係辞めにしないか？正直、ハッキリさせよう。」

美紀「ん？」

父「美紀ちゃんに俺と付き合う気がないなら、金輪際俺の事は忘れてほしい。」

美紀「は？どついう事？」

父「最初から、こんな関係っていけない事だつてわかってたけど、もうダメなんだよ。」

美紀「何がダメなの？」

父「…美紀ちゃんの事、好きになってきちゃったから…」

美紀「え？何？」

美紀はなんとも言えない表情を浮かべている。そして少し笑った。

美紀「え？別に良くない？何がダメなん？」

父「だって、正直こんな関係に好きとかそういう感情はいらないだろ。俺自身がダメになるし、ややこしくなるんだよ。君はまだ若いからわからないだろうけど…」

父は難しい顔をしながら、必死に説明をするが、対照的に美紀の表情は冷静なようだ、

父「実は娘がいると言ってしまった時に、気付くべきだった…真剣に付き合いたいって事だもんな、こんな事言うなんて…」

美紀「もうわかったよ、忘れたらいんでしょ？いいよ、あたしの番号消しといて。」

父「ゴメン…」

美紀「いいよ別に、お金たくさん貰ったし。ま、おじさんこういう事するぐらい寂しかったんでしょ？いるんだよねー、そんな男。あんたはそういう男達と一緒にして事だね。」

父「…」

ゆっくり下を向く父。

美紀「ま、娘さんといつまでも仲良く暮らしなさい。可哀想だけどね娘さん、こんな父親を持って。残念だなー、おじさんは他の男達と違うと思ったのに。」

父「…」

一方その頃菜穂は…

菜穂「はあ…聞かなきゃ良かったな…お父さんが若い女と一緒に歩いてたなんて。早希も悪気があって言ってきたんじゃないと思うけど…援交だよな、多分。」

ふと母の写真に目をやる菜穂。写真を取ろうと手を伸ばすが、誤って床に落としてしまう。

菜穂「やばっ！…ん？何これ。」

写真立てと写真の中には、生前母が書いたと思われる手紙が入っていた。

菜穂「何でこんなところに？」

菜穂は手紙を手に取り、読んでみる。

菜穂へ

病室からこの手紙を書いています。

この手紙を読んでいる頃、私はこの世にはいないでしょう。

お父さんとは仲良くやっていきますか？

夜遅くまで遊んでお父さんを困らせてはいませんか？

私は心配です。

私が生きているうちに、菜穂に伝えたい事があります。

これから先、どんな事があっても、お父さんと仲良くしてね。

思春期でお父さんを嫌いになったり、許せない事もあったりするでしょう。

でもね、
家族と一緒に暮らせるという事は、素晴らしい事です。
やっぱり、家族がいるだけで幸せになる事があるの。
病室にいと、しみじみそう思います。
だから、どんな事があってもお父さんと仲良くね。

菜穂、いつまでも幸せに暮らしてください。

母 菜津子より

菜穂「お母さん…」

涙を流す菜穂。そして菜穂の頭に小さかったあの頃の記憶が蘇る。

(あたし大きくなったら、パパのお嫁さんになる！)

菜穂「お父さん…」

家を出る菜穂、行く先はわからない。でも、お父さんに会って話
がしたいと思った。だから外に飛び出した。いてもたってもいられ
なかった。パジャマのまま。
しばらくして、人が多い繁華街まで菜穂はやって来た。

菜穂「…何やってんだろ、帰んなきゃ。…パジャマだし。ヤバイ。」

帰ろうと思ひ、来た道を戻ろうとする菜穂。その時、菜穂の目に飛
び込んできたものは、
ラブホテルに入っていく父と美紀の姿だった。

菜穂「お母さん、ゴメン…これから先お父さんとうまくいく自信ない。」

走って家に帰る菜穂の目には、涙が溢れていた。

父「俺は他の男達とは違う！俺は俺だあ！」

美紀「本当だよ、認めてあげるよ。おじさん本物のクズだね。」

父「そういえば、この前美紀ちゃんに貰った手紙、君の言う通りの場所に隠したけどいつ見ていいの？」

美紀「まだだよ。まだ見ちゃダメ！」

父「最近娘の目が気になってたからな。ただでさえ反抗期なのに大変だったんだから…」

美紀「菜穂ちゃんだっけ？そうだね、行動力ある子だからすぐばれちゃうかもね。」

父「行動力あるかな？」

美紀「感情豊かだしね。」

父「よく知ってんなー、話したっけ？」

美紀「ふふ…なんとなくねっ！」

(後書き)

お疲れ様です。

自分の体験とかじゃないです。

フィクションです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7231x/>

父と娘と女

2011年10月19日03時10分発行